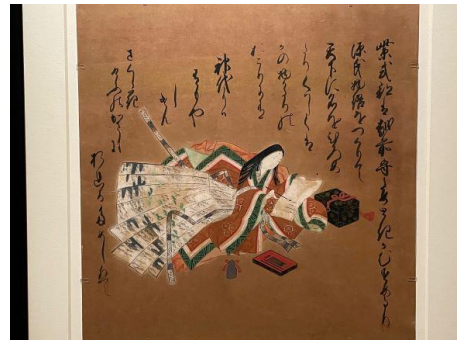


218 今も新しい古典文学作品—源氏物語（2023 年 12 月 7 日）

前回、西陣織の源氏物語絵巻と[平安時代の国風文化](#)を取り上げました。今回は、源氏物語絵巻の元になった源氏物語に焦点を当てます。

源氏物語の作者は、紫式部です（写真右は、17 世紀に描かれた紫式部）。970 年代前半に生まれ、40 年余りの生涯だったと考えられていますが、はっきりとした生没年は分からず、本名も不詳です。紫式部は、和歌の名手として知られ、紫式部の和歌は[小倉百人一首](#)に収められています。一条天皇の中宮彰子の女房として宮仕えしていたときの宮中の様子を記した「紫式部日記」も残されています。



源氏物語は、54 帖から成る長編小説です。千年前に書かれたこの物語は、世界的に見ても最も古い長編小説の一つに数えられています。この作品は、通説では三部構成と考えられています。帝の血を引き、容姿と才能に恵まれた主人公の光源氏の誕生から、数多の恋愛を繰り返し、栄華を極めた時代を描いた第一部、老いて過去の過ちや若い妻の裏切りに苦悩する光源氏が雲隠れするまでを描いた第二部、光源氏の子孫の恋愛や人生を描いた第三部に分けられます。恋愛、権力争い、裏切り、嫉妬、別れなど、数多くの登場人物を通して当時の貴族社会を描いた壮大な人間ドラマです（写真右は、第一帖「桐壺」を題材とした歌川広重による浮世絵、1852 年）。



源氏物語は早くから注釈書が作られ、19 世紀末以降は、何人もの日本の著名な作家が、現代語訳を発表してきました。21 世紀になっても、新たな訳本が出版されています。物語が描かれた時代の貴族社会を知らない現代人が読んで理解できるように言葉を補いながら、紫式部による巧みな心理描写を失わず格調高い訳を作るとするのは、一流の作家にとって大きなチャレンジです。現代の日本人で、難解な源氏物語を原文で読むことができる人は、ほとんどいません。しかし、現代語訳のおかげで源氏物語には新たな魅力が加わり、今も読み継がれています。現代でも、多くの映画、ドラマ、漫画の題材として取り上げられています。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

源氏物語は、30 か国語以上の言語に翻訳されて、日本国外でも読まれています。19 世紀末に英語訳が作成されました。それとは異なる英語訳の一部を重訳して最初のフランス語訳が作られ、1988 年に日本古典文学者のルネ・シフェール（1923-2004）が、原文から翻訳したフランス語版の完訳が出版されました。さらに、2007 年には、ディアンヌ・ド・セリエ社から、この完訳に 500 近い日本画による挿絵を添えた豪華装丁版が出版されました。解説が添えられた美しい挿絵は、平安時代の宮中の物語や背景を理解するために大きな助けとなります。挿絵入りの本は、絶版となったものの、今年の 11 月に再版されました。1999 年にフランスのイナルコ大学（フランス国立東洋言語大学）の日本研究者グループが、新たなフランス語訳の準備を始め、2008 年に第一帖の翻訳が出版されました。翻訳者によると、原文の格調高い文章の雰囲気をも崩さないように配慮しながら、分かりやすさを追求するために翻訳を工夫したと言います。例えば、原文では一つの動詞に二つの意味を掛けているところがあり、そのような動詞は、フ



ランス語では二つの動詞を併記したと言います。一つ一つの単語を翻訳するために、文法を精査し、適切なフランス語を当てはめていき、要すれば言葉を補っていくという地道で忍耐力を必要とする作業を繰り返し、長編大作の源氏物語のフランス語訳を完成させた翻訳者グループの努力には、頭が下がります（写真左は、第五帖「若紫」を題材とした漆器の盆、18 世紀）。

千年前に書かれた作品は、現代の翻訳者の努力によって新たな命を得て、現代社会に送り出されています。54 帖の全てを読破することは容易ではありませんが、一部なりとも翻訳された源氏物語を読むことで、日本の平安時代の貴族文化の世界を体験してみたいかがでしょうか（写真右は、第二十八帖「野分」を題材とした屏風、16 世紀末）。

